

小さなつながりの大きな世界

弘前大学教育学部附属中学校

葛葉小雪

「タマゾン川ってなんだ？外国にあるのかな？」題名からこれは外国の話だと思った。しかし、ちがった。これは国内の川に関する話だ。他人事ではないぞ。

タマゾン川とはアマゾンの魚がたくさんとれた多摩川に筆者が名付けた名前だ。食用やペットとして外国からつれてこられた魚たちは人間の勝手な都合で川に捨てられるのだ。

このような外来種は在来種が長い年月をかけてつくってきた生態系をこわしてしまう。在来種を守るには外来種を殺すという選択肢しかないのだろうか？いいや、筆者はおさかなポストというものをつくった。それは飼えなくなった魚などを、みんな生けすの中に入れて飼育して、そして里親が見つかったらその人にわたすというシステムだ。こんな発想、どこからわき出てくるのだろうか。おさかなさんへの愛からやつてくるのだろうか。

外来種のこと以外にも多摩川には問題がある。高度経済成長期には家庭から出る排水を川にそのまま流していた。多摩

川は死の川と言われるほどくさく、きたなかった。うでを突っこむとねっとりとした泡がうでの毛にからみつくぐらい……。そう。筆者はなんと死の川にうでを突っこんだのだ。たしかにねっとりした泡が浮いている川は嫌だ。だがそれよりそんな川に手を突っこむ筆者の方が衝撃的だった。さらにその川に住むアユもすぐくまずいのだ。洗剤とシャンプーの香りが鼻を抜けていくぐらい……。そう。筆者はなんと死の川に住んでいるアユを食べたのだ。たしかにかじったしゅん間洗剤の香りがするアユなんて嫌だ。だがそれよりそんな川に住んでいる魚を食べる筆者の方が衝撃的だった。

今の多摩川は、人が泳げるぐらいきれいになったのだ。下水処理場で下水をきれいにし川へ流すのだ。一見きれいと感じてしまうがとてもきれいなのだ。さらに、そのきれいになった水には水中プランクトンのエサであるチッソとリンという有機物が入っているのだ。これで魚の数も増える。

これだけでは終わらない。死の川問題が解決しがまた問

題が起こる。現代のくらしではお湯を大量に使う。だから、下水処理場で処理される水も温かくなり、川の水温が上がる。川の水温が上がるとどうなるのか。外来魚が暮らしやすい環境になる。アユが多くなりすぎてバランスを保てない。アユの産卵の時期がおくれ、小型化してしまう。下水処理場は停電が起きると何もできなくなる。

解決したと思えば次から次と問題が出てくる。いくら環境が変わるから、といつても、困ってしまう。ほんの少しの出来事がつながってつながって——大きな事件になる。だから予想して大事件をくい止めるのはむずかしいだろう。で

も、やることはやるべきだ。たとえばテレビなどで地球温暖化の話をしていたから、少し節電してみよう、とか、ごみの分別ってあまりちゃんとやってなかったから少しやってみよう、とか。そしてもしも大事件が起きたら、今後どうなるんだろうとただ見てないで今やるべきことを考え、実行しないといけないのだと思う。死の川にうでを突っこんで、そこに住むアユを食べた筆者。そんな筆者の願いは、きつと知恵を出して問題を解決しながら、いつか生態系をもどすことだろう。筆者の大きな思いやりに、地球の未来について考えながら、この先の人生を歩んでこたえたい、と考えている。